

救済なき死

—ピーテル・ブリューゲル(父)作《死の勝利》をめぐる考察—

香月比呂（九州大学大学院）

16 世紀ネーデルラントの画家、ピーテル・ブリューゲル(父)の《死の勝利》は、「死」の軍勢が生者に襲いかかる様を描き出した作品であり、先行研究では、その着想源となった主題や図像伝統に関する議論がとりわけ盛んに行われてきた。しかし本作品において、中景右で運び出される棺、中景左の棺の安置と埋葬、後景の葬列と、複数箇所を繰り返し描かれている「葬儀」のモチーフは、壮大な死の闘争を目撃する鑑賞者の視点を誘う重要なモチーフとして登場するにもかかわらず、ともすると死の付随的産物として等閑視される傾向にあった。そこで本発表では、葬儀の場面の描写に画家ブリューゲルのより積極的な意図を求め、この特異なモチーフが作品の鑑賞者に死の恐怖を喚起させる上で果たした役割について考察したい。

葬儀という現実の儀式の描写は、死を主題とした図像作品においてもなお極めて稀であった。ブリューゲルの描いた葬儀のモチーフを理解する手がかりは、実に、葬儀が例外的に頻繁に描写された媒体、すなわち聖務日課書や時禱書の中にある「死者のための聖務日課」が記された頁の挿絵に求めることができる。「死者のための聖務日課」とは、定時課や葬儀の際に死者の救済を願って捧げられた祈りであり、最後の審判の日まで煉獄で罪を清めている死者の贖罪の期間は、この生者の祈りによって短縮され得ると考えられていた。この死者を救うための日課書の頁に、葬儀という現実的場面と、「死」の擬人像が姿を現す非現実的な場面が、しばしば並置されるようにして描かれたのである。

このことを踏まえて《死の勝利》を見てみるならば、ブリューゲルは葬儀を「死」に執り行わせることにより、現実と非現実とを融合させていると考えられよう。まず、「死」が生者に襲いかかるという非現実的な絵画世界に、葬儀という現実的なモチーフを挿入し、それにより、鑑賞者に壮絶な死の情景をより身近な、真に迫った世界として体験させるよう構想されている。そして、死者のための聖務日課にも描かれた葬儀、すなわち死者の救済に重要な意味を担っていたはずの儀式を行う主体を、今まさに生者の命を奪う「死」として描いている。その倒錯的な葬儀の場面は、死後の救済という本来の意義を失い、死を最後の審判に至るまでの過程の一つと捉えていた当時の鑑賞者に、救いのない死に対する恐怖を喚起させただろう。結果として、ブリューゲルの描いた葬儀のモチーフは、既存の宗教的、文化的な価値観を打ち崩した、いわば「さかさまの世界」を創造せんとする画家の表現語彙の一つであり、それによって観賞者に、やがて訪れる現実の死を痛烈に意識させようとしたと考えられるのである。